

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！ — 第三回（99年度）春期ドイツ語インテンシブコース報告 —

大塚 讓 編
下田 恭子
ダーニエル・アルノルト
フェリツィタス・ドーブラ
ハイコ・ナロック
ハイケ・パーペンティン

目次（カッコ内は執筆者）

0. はじめに
1. 概況（大塚 讓）
2. コミュニケーションの戦略（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）（大塚 讓）
3. 旅行プラン／絵の中に（諺）ことわざを捜す／物の使い方を書き説明する（下田恭子）
4. クイズ「スポーツ」／Rostiっていう料理知ってる？／スイスの村の生活
(ダーニエル・アルノルト)
5. 寛容と非寛容／ドイツの少数民族ソルビア人（フェリツィタス・ドーブラ）
6. 音楽「若き神々たち」／恋愛—婚約—結婚—離婚（ハイコ・ナロック）
7. ドイツの雑誌のコマーシャル／復活祭（ハイケ・パーペンティン）

0. はじめに

私たちは、従来と同じく、意欲ある学習者に満足の行く練習の場を与え、思う存分アクティブになりうる機会を用意したいと願い、「第三回春期ドイツ語インテンシブコース」を開催した。以下はその報告である。記録を残すことがコースの改善に結びつくと考えるからである。尚、ダーニエル・アルノルト、フェリツィタス・ドーブラ、ハイコ・ナロック、ハイケ・パーペンティン各氏の報告は、ドイツ語で執筆されたものを大塚が訳出したものである。

1. 概況

大塚 讓

第三回インテンシブコースは、1999年3月29日から4月2日までの5日間にわたって実施された。時間配分は各クラス毎日2時間240分とし、午前1時間(120分)、昼食後1時間(120分)とした。5日間で1,200分となり、これを通常クラスの授業時間数に換算すると90分授業を週3回行うクラスの約1ヶ月分以上、90分授業を週2回行うクラスの約1ヶ月半分以上となる。

今回は特に総合テーマを設けなかった。それは、まず第一にそのために必要なミーティングの時間や労力を確保するのが必ずしも容易ではないからである。第二に共通テーマを立てない方が、各講師が担当クラスのレベルや関心に配慮しつつ、より自由に現代のドイツ語圏の様々な側面を紹介できるからである。もちろん教案は事前に大塚に提出されるので重複などの問題点を調整する態勢はできている。

参加者数は段階Ⅰが10名、段階Ⅱが6名であった。留学経験のある二人の4年生には、授業の

中で留学報告をしてもらったり授業の準備のお手伝いをしてもらったり, ささやかな彼ら用の授業(ネイティブスピーカーに対する環境問題についてのインタビュー<1時間程度>)に参加してもらった。

プログラムの内容[※]について言えば, 最初の時間に参加者全員がなるべく早く打ち解けるように段階ⅠとⅡが共に参加する「出会いのゲーム」を置いたのは例年通りであった。大塚とアルノルトがこれを企画・実施した。

今回は残念ながら段階Ⅱのプロジェクトを実施しなかった。それは, プロジェクトを実施すればそのためにプログラムの中に膨大な時間を確保しなければならないこと(例えば前は期間中午後は毎日プロジェクトを行った), 教師の側の準備・実施に要する共同作業が必ずしも容易ではないこと, 逆にプロジェクトを行わないとすれば多くの通常の実験授業を提供でき, それはそれでコースそのものが多彩な内容になり大きな意味があること, などがその主な理由であった。ただし, 我々のような一貫したカリキュラムを持たない臨時コースの場合, コースで学んだ知識・技能を集約し統合する仕組みを欠いていることは依然大きな問題点であって, 学習事項を適宜統合できるプロジェクトには捨てがたい特長があることだけは, 今後のためにも再度確認し強調しておきたいと思う。

2. コミュニケーションの戦略(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)

大塚 讓

《Stufe I》

テーマ: ドイツ語圏の人々とコミュニケーションを交わす際に必要な基本的戦略を学ぶ。

目標: できるだけ多くの基本的場面を演じ表現を身に付ける。

教材: (1) Videothek Deutsch, Szenen im Alltag (hueber Verlag), (2)「コレクション・ドイツ語③話す」(中山 純 著, 1997年白水社)

実施

ビデオの場面をモデルにペアで類題を演じていった。

1) コミュニケーションの戦略(Ⅰ) 発端と終結

最初に「コレクション・ドイツ語③話す」に従ってコミュニケーションの一般的構造を理論的に学んだのち, “Videothek Deutsch”を参考に, 挨拶の言葉と実際の挨拶のし方, 別れの言葉と実際のお別れのし方を, 実際に演じてみた。親しさの度合いによって挨拶の言葉はどのように異なるのか? 相手との距離は? 握手か抱擁か? アイコンタクトのあり方は? また親しさの度合いによって別れの挨拶はどのように異なり, その際の仕草は? 第一回目はこのように一般的なコミュニケーションの始め方と終わり方を実際にペアごとに演じてみた。

2) コミュニケーションの戦略(Ⅱ) 空港・駅・ホテル

ビデオを見ながら駅での列車についての問い合わせ, 乗車券や特急券の購入と座席を指定する場面を学び, 条件を変えたいいくつかの類題にペアワークとして取り組んだ。各々の場面に必要な語彙もその都度学んだ。時間の都合で空港やホテルのフロントの場面は割愛した。

3) コミュニケーションの戦略(Ⅲ) 旅行案内所・買い物・レストラン・道を尋ねる

ビデオを見ながら, インフォメーションでホテルを予約しそこまでの道順を聞く場面, タクシーで目的地まで行く場面を理解し, ペアで類題を演じてみた。買い物, レストランの場面は時間の都合で割愛した。

4) コミュニケーションの戦略(Ⅳ) 車中・約束・招待

同様にビデオを利用しながら、小さなパーティーに招待され、行くことを約束する場面と先約があつて断る場面、次に実際にパーティーに臨んで人に招待されて言葉を交わし、最後ホストに丁寧に礼を述べて別れを告げるまでの場面を演じてみた。若い人同士のパーティーとややフォーマルなパーティーとの違いを踏まえ、またペアの組み合わせも何度も変えるよう工夫した。

《Stufe II》

基本的に授業の内容、方法とも Stufe I と同じだが、Stufe I での3日分を2日間で消化したこと、3日目に実際にネイティブとのインタビューを試みたこと(授業の最初の30分で準備をし、次の30~40分でインタビューを行い、最後の30~40分でインタビューの内容を整理した。意図的にインタビューパートナーについての一切の事前情報は与えず、パートナーは決まった時間に現れてインタビュー後直ちに立ち去るよう段取りをしておいた。)、4日目は予定を急遽変更して、交換留学から帰国したばかりの榊山君に、パイロイトの町とパイロイト大学についてインターネットからの最新情報に基づいて報告してもらったこと、が Stufe I との違いである。

3. 旅行プラン/絵の中に(諺)ことわざを捜す/物の使い方を書き説明する(下田恭子)

《Stufe I》

テーマ: [Reiseplan: エリカ街道・ゲーテ街道・メルヘン街道]

教材: 旅行ガイド本・各都市の観光案内・地図・鉄道時刻表・ドイツ写真集・旅行計画モデル・実際に使用した切符など

目標: 様々な資料を用いて1週間のドイツ旅行を計画する。

最初に10分程時間を取り、ドイツ旅行に関して一般的な事柄について話をし、その際にジャーマンレイルパスを含む鉄道の切符や地下鉄の切符など手持ちの実物を提示した。そしてエリカ街道、ゲーテ街道、メルヘン街道についての概要を写真や地図を見せながら説明した。次にモデルプランの説明(説明文および表(プリントと計画用紙を配布))。二人ずつの組になって各街道から一つを選択してモデルプランを参考に独自の旅行計画書を作り、時間の終わりに発表すること、交通機関は鉄道を使い、日本ードイツ間は指定の飛行機に乗ることを指示した。

学生たちはたつぷりと用意した各街道の案内書や街道沿いの都市の観光地図やパンフレットなどを熱心に眺め、読み、楽しそうに、またかなり真面目にプラン作りに取り組んだ。しかしあまりに資料が多く時間がかかり、残念ながら発表にはこぎ着けなかった。

教師にとっては計画通りに進めなかったことが反省材料となったものの、学生たちには生きた教材は教科書にはない刺激があつたらしく、このプラン作りをそれなりに楽しんだ様子がうかがえた。パック旅行に頼らずとも自分自身でドイツ旅行を計画する自信がどうにかついた、ということを確認して終了。配付した資料は各自が持ち帰った。

《Stufe 2》

テーマ: ことわざ探し-ポスターの絵から

教材: ことわざ20句(語句説明付き)・ポスター・ワークシート・カードゲーム

目標: 日常よく使われることわざ20句を短時間内に学習し記憶する。

まず、ことわざ20句とポスターを手にした参加者は2人一組となってポスターの絵からそれぞれ

れのことわざに合致した絵を探す作業を行った。ことわざの意味と絵の描き出す意味を考えながら1つ1つ答えを出していった。ことわざの解釈は様々であったが、ポスターの絵は分かり易く、正解はたやすく得られた。次に、ことわざの意味を正しく解釈するためにワークシート（自作）を配布し、それぞれの場面設定文がどのことわざを指しているのかを考えた。実に様々な意見があり、それらの解釈は大変興味深く、学生はうーんとうなったり笑ったり顔の筋肉の運動も十分にしようだった。

ことわざの意味がよく判り、ことわざそのものが耳慣れ見慣れたところで Luckentext を配り、すでに手元にあるプリントは見ないで穴埋め作業。もうよく理解しているので5分足らずで終わり、それぞれが答え合わせをした。

さらにことわざを印象付けるため、百人一首風カード遊びをした。ことわざを上上の句と下の句に分け、下の句のカードをテーブルに並べ、教師が上の句を読んで2チームに分かれて競い合った。歓声のうちに2回終了。この頃にはもうほとんどのことわざが頭に入っていたと思われる。最後にこのカードで爺抜きゲームをした。残念ながら1回終了したところで時間切れとなった。

学生も教師も楽しみながら20句のことわざを考え、遊んで覚えた。また日本のことわざとの類似点にも触れ、ドイツ人の考え方についても想いを巡らせることができた。

4. クイズ「何のスポーツでしょうか?」/Rostiっていう料理知ってる?/スイスの村の生活(ダーニエル・アルノルト)

○クイズ「何というスポーツでしょうか?」(3月29日(月) Stufe 1)

◇ヒント:日本人の友人や知人と会話をしていて気になるのは、日本語はスポーツとの関連ではほとんどもっぱら「する」とか「やる」とか「～選手」という語彙を使うことである。このことがしばしば「スキーをする」(Ski spielen)とか「ボクシング選手」(Boxen spieler)といったようなドイツ語としては胡散臭い語彙構造に導くのである。

◇目標:最もよく知られたスポーツとそれに対応する語彙に関わるワークシートの作成
各々の学生は自分の好きなスポーツをそれに対応する正確な語彙で母語話者に伝えることが求められる。

◇導入:学生たちはドイツ語圏の有名なスポーツ選手の絵によってテーマへと導き入れられたが、その際彼らはスポーツ選手の名前やスポーツの種類と絵とを結びつけた。

◇スポーツ当てゲーム:その都度一人の学生がパントマイムによって様々なスポーツを表現しなければならなかったが、それらを他の学生たちは当てることを求められた。

○Rostiって料理知ってる?(3月29日<月>, Stufe II/3月30日<火>, Stufe I)

◇ヒント:多くの日本人は「フォンデュー」を知っているが、しかし本来のスイスの国民料理は「Rosti」である。

◇目標:いくつかの重要な料理に使う小道具と料理に特有の表現を知ること。

◇導入:Stufe II → a) テキスト「ジャガイモの由来」(語彙説明付き)

b) 統計資料:最も重要な4つの農産物である米・ジャガイモ・小麦・大豆の、耕作地帯による収穫量の比較

※資料提示の意図=ヨーロッパにおけるジャガイモの重要性を示すため

Stufe I → ドイツ語圏の有名な料理（ウィーン風カツレツ、ザウアークラウト付きアイスパイン、フォンデュー等）がそれぞれの本場と結びつけられなければならなかった。

◇ Rosti を料理する：Rosti はとても簡単な料理であり、わずかばかりの食材が必要だけである。

全ての料理の道具が二つの大きな机の上に広げられた。学生たちはあらかじめ用意された絵付きのカードと対応する小道具を結びつけなければならなかった。重要語彙の説明の後、私たちは直ちに準備に取りかかった。どの学生にも一定の任務が与えられた（例えばジャガイモを輪切りにする、塩をふりかける、油をフライパンに注ぎ入れるなど）。事前に習得されていた新しい語彙を用いて学生たちは自分たちの仕事のプロセスをドイツ語でコメントしなければならなかった。それに続いてリラックスした雰囲気の中で一緒に調理された Rosti が試食されたのであった。

最後に学生たちはロールプレイにおいて三つのグループに分かれて習得した語彙を用いて前もって与えられたダイアログ（学生の住居共同体における夕食の準備）を完成させなければならなかった。

○スイスの村の生活（3月30日〈火〉 Stufe II）

◇ ヒント：このインテンシブコースに参加した大半の学生たちは都市環境の中で育ったとの仮定の下に、私はスイスの典型的な村の生活を少々紹介しようと思った。

◇ 目標：村での日常生活、例えば出来たてのパンやチーズを毎日買うこと、毎朝6時になると協会の塔の鐘が鳴ることなどたくさんのおもしろいことを知ること。

◇ 導入：私が作ったゲーム板（A4版4ページ）を眺める。一日が色々なゲームのフィールドに分かれている。それはパン焼き部屋にいるパン屋に始まり、ひなびた村の居酒屋（Beiz と言う）での法定閉店時刻の場面で終わる。全てのフィールドには、それに対応する建物や活動を表す絵が描かれている。語彙は事前に説明された。

◇ ゲーム：双六遊びの要領で学生たちは自分のコマを動かす。付属の用紙の上には、それぞれのフィールドについて、絵で示された活動を言葉で説明する小さなテキストが配された。学生たちはこのテキストを読んだが、その際不明の語彙は全体の議論で明らかにされた。また点数を集めるためには、一つのフィールドにつき一つの文法問題が正確に答えられなければならなかった。それら文法問題は“Themen neu”のこれまでに扱われた諸章に依拠したものだった。残念ながらゲームは時間的理由から終わりまで行うことが出来なかった。締め括りとしてスイスと日本における日常生活の相違についてディスカッションするのが望ましい。しかし以上の作業を学生たちは楽しんだように見えた。そして楽しむことこそが学生たちをドイツ語学習の継続へと動機付けるものなのである。

結論：

小樽商大のインテンシブコースでの授業は私にとって日本の学生たちとの初めてのコンタクトだった。結論を先取りして言えば、私は肯定的な意味で驚いた。学生たちの動機（勉強意欲）は大変プラスの影響を私に及ぼした。多分そのせいだと思うが、授業は私にはとても楽しかった。

次回のインテンシブコースが楽しみだし、私の側の若干のミス（時間の問題、語彙の難しさなど）の訂正をも試みるつもりだ。

5. 寛容と非寛容／ドイツの少数民族ソルビア人（フェリツィタス・ドーブラ）

《Stufe I》

テーマ：寛容と非寛容

タイトル：「そんなに悪くないよ」

教材：1) 44 Spiele für Deutsch als Fremdsprache, S.96/97 Nr.42 (Max Hueber Verlag 1993)

2) 例示用カセット (Annedore Hähnel, Michael Hähnel, Felicitas Dobra の対話)

「なんてひどいことを！」という表題のテープ、つまり教材「44 Spiele」で提供された親切ヴァージョンの正反対を行くテープが、二つの議論 [①「そんなに悪くないよ」/②「なんてひどいことを!」] の背景説明の後、流された。

私がネガティブなヴァリエーションを導入に使ったのは、学生たちにドイツの日常生活で良い友達との間でさえ考えられる極端なケースをも紹介するためであった。

その上で初めて私たちはポジティブなヴァリエーションの内容理解に取りかかった。

その際私たちは2, 3の学生のためにゲームの語彙を具体的に説明しなければならなかった。次に学生たちはペアでまず二つのヴァリエーションを吹き出しの中に書き入れた。それから彼らは自分たちで組み立てたダイアログを皆の前で演じるよう求められた。学生たちはそのことによって同一の状況に対する多様な反応をまず頭の中で、次に言語的に追体験し、ペアで練習し、それから全員の前で演じたのであった。最後に私たちはもう一度別のワークシートを用いて「あなたは寛容ですか？」という問いについて様々な状況を手がかりに議論した。

《Stufe II》

テーマ：ドイツの少数民族ソルビア人

このテーマで私は、多くの日本の学生たちには比較的知られていないドイツ東部に住む少数民族ソルビア人について報告しようと思ったわけだが、このソルビア人は別の言語と文化を持つが自分の言語と同時にドイツ語も話し、ドイツ文化の一翼をも担っているのである。その際私は、「ラウズィッツ、美しい花嫁」(ラウズィッツ [Lausitz] とはソルビア人が住む地方名—訳注) というビデオを手がかりにその歴史と現在を紹介した。あらかじめ私はワークシートを使ってこのビデオで扱われている様々なテーマについて学生たちと準備作業をした。語彙は語彙表に説明されていた。最後に私たちは私がファックスを通じて行った一人のソルビア人女性とのインタビューを役を振り分けて読んだ。これに付随して理解をチェックする問題を行った。インタビューとビデオを扱ったのはまた伝統と現代生活との軋轢を示したいからでもあった。日本におけるマイノリティーの問題が若干話し合われた。

ランデスクンデ上の情報を与えるために、私は学生たちに美術工芸品とラウズィッツ地方の風俗習慣を示すカラーコピーを与え、ソルビアの民俗音楽を取めたCDを聞かせた。

《まとめ》

Stufe I

第1段階の学生たちは最初「謝る」「何かを和らげる」「誇張する」といったテーマに対する語彙に手こずっていた。誇張することは日本の学生には困難かもしれない。それは日本では相手の立腹やうるさいリアクションを避けようとする傾向があることに起因しているかもしれない。第

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

1のヴァリエーションの方が学生たちには簡単だった。二つのヴァリエーションを書くこととそれらを演じることとの間の時間が短すぎた。メモを見なかった学生はごくわずかだった。自由に話すことへの不安はすでにコース以前に授業の中で継続的に取り除かれるべきであろう。

最後に学生たちはテーマ「寛容」に対する彼ら自身の意見を述べることを楽しんだ。

Stufe II

学生たちはテーマに大きな関心を示した。彼らはたくさんの新しい語彙を受動的に理解しなければならなかった。しかし彼らはそれをうまくこなした。これにはビデオも一役買っていたが、私はビデオの一連の内容を簡単にまとめて紹介しておいたのであった。西ドイツの名所(ノイシュヴァーンシュタイン城やメルヒェン街道)についてランデスクンデ上のより多くの情報を持っている学生たちにとって、東ドイツに少数民族がいてやはり伝統の保護育成と今日の生活との間の軋轢に苦しんでいることを知ったことは、興味深いものがあった。

6. 音楽「若き神々たち」/恋愛—婚約—結婚—離婚 (ハイコ・ナロック)

《Stufe I》“音楽：若き神々たち”

参加者数：9名

時間の長さ：120分

教材：“Moment mal!” (ランゲンシャイト社) 第3課

授業の主目標：聴解力を磨く/ドイツ語の熟詞を定着させる

A. 授業のプロセス

1. 導入

1.1.

契機：教師は学習者に18ページの旅程表を観察しそこに記載された国名を当てるように要求する。

学習者の活動/練習形態：国名を識別し言う/全員

部分的学習目標：好奇心を喚起する。様々な状況を導入する。

メディア：教科書のコピー，ボード

1.2.

契機：教師は学習者に18ページのテキストを読み、旅程表と比較するよう要求する。

学習者の活動/練習形態：テキストを読み情報を比較する/個別作業および全員

部分的学習目標：大意を読みとる読解力

メディア：教材のコピー

2. 練習

2.1.

契機：教師はインタビュー (A2) のカセットを聴かせ、これについて次のパターンで質問をする：“Wie lange sind die YG in Deutschland? Wie lange spielen sie in Amerika?” (“若き神々たち (YG)” はドイツにどのくらいの期間滞在しますか? 彼らはアメリカでどのくらいの

期間演奏をしますか?”)

学習者の活動／練習形態：国名と期間を耳で聞き分け口で再現する／全員

部分的目標：的を絞った聴解力

メディア：カセット

2.2.

契機：教師は学習者に 19 ページのテキストを読んで、それに基づいて 25 ページ練習 4 の表に人物についての情報を記入するように要求する。

学習者の活動／練習形態：テキストを読み、情報を認識し整理する／個別作業

部分的学習目標：的を絞った読解力

メディア：教科書のコピー（テキスト＋表）

2.3.

契機：教師は学習者にインタビュー A 4 を聴き、インタビューされた人物たちについて質問された情報を記入するように要求する。

学習者の活動／練習形態：聞き取り記入する／個別作業

部分的学習目標：大意をつかむ聴解力と的を絞った聴解力

メディア：カセットおよび教科書のコピー

2.4.

契機：教師は学習者に、表の中の情報を練習 4 b により定められたやり方でお互いに尋ね合うように要求する。

学習者の活動／練習形態：問い答える／ペアワーク

部分的学習目標：一定の情報に対してふさわしい疑問文を作ることができる。

メディア：教科書のコピー，ボード

2.5.

契機：教師は学習者にワークブック 25 ページ練習 6 のテキストを読み表の空欄を埋めるように要求する。

学習者の活動／練習形態：読み表の空欄を埋める／個別作業と全員

部分的学習目標：的を絞った読解力，楽器に対する語彙を拡大する。

メディア：教科書のコピー

2.6.

契機：教師は学習者に、サンプリング（ワークブック 26 ページ練習 7）を聴き、話された数を聞き分けるように要求する。

学習者の活動／練習形態：聴きそして聞き分ける／個別作業および全員

部分的学習目標：的を絞った聴解力

メディア：カセット

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

2.7.

契機：教師は学習者に、A8のテキストをペアでないしは一人で読むように要求する。

学習者の活動／練習形態：読む／個別作業および全員

部分的学習目標：対話のプロセスを理解する。

メディア：教科書のコピー

2.8.

契機：教師は学習者に、ワークブック練習15, 2と3の穴あきテキストを埋めるように要求する。

学習者の活動／練習形態：聞き取り穴埋めをする／個別作業および全員

部分的学習目標：的を絞った聴解力。

メディア：カセット

2.9.

契機：教師は学習者に、諸評価概念をワークブック練習16のスケール上に整理するように要求する。

学習者の活動／練習形態：理解し整理する／個別作業および全員

部分的学習目標：語彙の拡大（諸評価概念）

メディア：教科書のコピー

B. 手短な計画の解説と締め括りの授業評価

インテンシブコース全体の目標は、未習の文法項目の導入よりはむしろ既習の文法項目の定着にあるのだから、教師は既知の語彙の定着を図りつつ一般的な聴解力の改善を主眼とする授業を行うことに決定した。ここで使用された教材の元々のコンテキストにおける主目標は新しい語彙として数詞を導入することであった。しかしこの授業では、この語彙は学習者には既知のものであったので、課題を聴解力の錬磨に絞り、語彙についても学習者が「音楽」、「楽器」、「話し言葉における価値判断にまつわる表現」の領域で若干増やすことに的を絞ったのであった。練習の難易度は学習者のレベルに相応しかつたし、進歩はこのレベルに合致した速さであった。学習者に特別な関心を引き起こしたのはサンプリング音楽であった。学習目標は達成された。

《Stufe II》「恋愛」「婚約」「結婚」「離婚」

参加者数：4名

時間の長さ：120分

教材：“Stufen International”（クレット社）第18課

授業の主目標：自由に意見や推量を表明する／語彙を拡大する

A. 授業のプロセス

1. 導入

1.1.

契機：教師は学習者に、テーマ関連語彙知っているかどうか尋ねる。

学習者の活動／練習形態：語の意味を説明する／全員

部分的学習目標：語彙を導入する。

メディア：ボード

1.2.

契機：教師は学習者に、136 ページ 1. の絵とテーマで挙げられた諸概念を結びつけ、この結びつきを根拠付けるように要求する。その際また絵の上に模写された生活状況を描写することが求められる。

学習者の活動／練習形態：絵を解釈し、諸概念を結びつける／絵の内容を説明する／推測を表明する／全員

部分的学習目標：テーマに対する関心を呼び起こす／自由に話す

メディア：教科書のコピー

2. 練習

2.1.

契機：教師は学習者に、1c) で挙げられた諸概念と 1F で模写された諸活動を結びつけるように要求した。

学習者の活動／練習形態：職業活動とそれに関連する諸概念を同定する／個別作業と全員

部分的目標：語彙を拡張する

メディア：教科書のコピー

3. 定着と応用

契機：教師は学習者に、模写された諸活動のどれが男たちと子供たちの双方から引き受けられるか、彼らの意見を表明するように要求する。また学習者に彼ら自身の状況について尋ねる。

学習者の活動／練習形態：意見を表明する／全員

部分的学習目標：語彙を積極的に使うことが出来る。意見を表明することが出来る。

メディア：教科書のコピー

4. 導入

契機：教師は学習者に、“夢の男” という概念を説明するように要求する。

学習者の活動／練習形態：概念を説明する／全員

部分的学習目標：語彙を拡大する。

メディア：ボード

5. 練習

5.1.

契機：教師は二人の学習者に、137 ページ 2a) のテキストを役割を分けて読むように要求する。

学習者の活動／練習形態：テキストを朗読する／全員

部分的学習目標：状況を理解する。

メディア：教科書のコピー

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

5.2.

契機：教師は学習者に、137 ページ 2 a) の表を読み、男性のどのような特性がドイツの女性たちにとって重要な報告するように要求する。

学習者の活動／練習形態：表を読み解釈する／個別作業および全員

部分的学習目標：表を説明できる、語彙を拡大する。

メディア：教科書のコピー

5.3.

契機：教師は学習者に、自分自身にとって重要な特性を挙げかつそれを根拠付けるように要求する。

学習者の活動／練習形態：話す／全員

部分的学習目標：意見を表明することができる

メディア：教科書のコピー

5.4.

契機：教師は学習者に、137 ページに模写された男性たちから自分の夢の男性を選び、選んだ理由を説明するように要求する。

学習者の活動／練習形態：話す／全員

部分的学習目標：意見と判断を表明することができる。

メディア：教科書のコピー

6. 意識化

契機：教師は学習者に、形容詞に対応する名詞を見つけるように要求する。

学習者の活動／練習形態：語を構成する／個別作業および全員

部分的学習目標：語彙におけるシステムティックな諸関連を認識する。

メディア：教科書のコピー

B. 手短な計画の解説と締め括りの授業評価

この授業の重点は話すことと自由に意見を表明することに置かれていた。すなわちこの Stufe II の学習者たちの場合には、すでに一定の語彙と話す能力が前提できる。話すきっかけとなるのは、テーマが学習者と年齢的に接点があり個人的な興味を引くような場合である。実施に当たって好都合な影響を及ぼしたのは、学習者の数が小さく、全学習者が女性であり、相互理解が明らかに良好であったことである。それ故に比較的屈託無く楽しみながら議論ができたのである。

話すことに続く第二の目標は、語彙の意識化と拡張であったが、とりわけ家庭内の活動と人間の特性とにかかわる語彙を重視した。学習者数がわずかだったので、全ての練習を全員で実施することができた。総体的に言って学習目標は達成された

7. ドイツの雑誌のコマーシャル／ドイツの復活祭（ハイケ・パーペンティン）

《Stufe I》ドイツの雑誌のコマーシャル

日本ではドイツの雑誌はさして広く知られておらず、ドイツのコマーシャルとなると知られて

いないに等しい。しかし単にコマーシャルのあり方が知られていないばかりではなく、1998年のインテンシブコースにおいて私の授業の一部でドイツのテレビのスポットコマーシャルについて確認したように一宣伝される当の製品も圧倒的に無名である。

〈授業の内容〉

私たちは前回テレビのスポットコマーシャルを取り上げるためにこの雑誌のコマーシャルの部分を削除したが、1999年のインテンシブコースでこの部分を取り上げるに当たってそのコンセプトを変更した。すなわち雑誌のコマーシャルにしばしば登場する形容詞と副詞を用いた文法的かつ意味論的作業に集中したのであった。

〈処置〉

昨年同様に私は全く異なる製品を宣伝する色鮮やかな全面広告を何ページか雑誌から切り取って来て、各ページにおいて一個の形容詞か副詞を太いペンを使って読めないようにした。これらのページは、ナンバリングされた上で簡単に手に取れるように教室のボード、壁、窓に掛けられたが、これがすでに視覚的に動機付ける効果があった。

学生たちは2人1組になり、各ペアは結びつけられるべき形容詞ないし副詞と宣伝対象の14の製品のリストとが記載されたワークシートを受け取った。最初私たちは全員で全語彙の理解を確認し合った。特に難しかったのは、形容詞“exklusiv”で、それは英語の形容詞“exclusive”と形は類似しているが意味が異なるからである。

ペアとなった学生たちの課題は、全てのコマーシャルページをよく見て、それぞれリスト上のどの語が欠けているかを決定することであった。私のアシスタントと私は、他よりも困っているペアに更なるヒントを与えようと待機していた。最も早いペアはもう15分後には作業を終えており、つまりは1ページにつきたった1分ほどしか必要としなかったわけである。それよりやや遅いペアは約20分から25分を要したが、それはとりわけ彼らが詳細にわたって議論し合ったからであった。このゲームの魅力は、文法的にも意味論的にも複数の解答の可能性がある部分を含む、という点にある。それによって、引き続いて全体で解答を比較し合う動機も大きいものになる。

〈結果と応用〉

学生たちがとりわけ大きな関心を示したのは、コマーシャル言語に典型的な言語的洗練、例えば書類ボックス用の宣伝における“ehrlich unentbehrlich”（実のところ無しでは済まない）というタイトル（見出し）あるいは他のコマーシャルにおける“exklusive Wäsche, inklusive Beratung”（アドバイス付き高級下着）といった概念の巧みな結合などに注意を喚起したときであった。

しかし単にこのような言葉や文体の観察が締め括りの議論のテーマだったわけではなく、当の宣伝対象である製品自身や宣伝方法もテーマだったのであって、例えば上で言及した書類ボックスのコマーシャルでは二人の日本人サラリーマンの姿が描かれていて、彼らはとある飛行場の床に座って彼らのアタッシュケースから箸で寿司を食べ、それを肴に日本酒を一杯やっているのである。別のコマーシャルでは“畳”という名のサンダルが宣伝される。この二つのコマーシャルは“ドイツのコマーシャルにおける日本のイメージ”というテーマに少し触れてみる格好の機会を与えてくれたのであり、事実学生たちはこれについて2、3の質問をした。

この時間を締め括ったのは、創造的な応用課題であって、ここにおいて学生たち自身がドイツ語の形容詞や副詞を用いて広告ページを作ったのであった（これもペアワーク）。この成果からは参加者たちの良好な（gut）言語レベルが見て取れた。

《Stufe II》ドイツでは復活祭はなぜそしてどのように祝われるか？

昨年のインテンシブコースで復活祭というテーマを扱ったのが私にとって意味のある経験となったのと、時期的にとっても良くマッチしていたので、今年度もまたインテンシブコースのメニューとしてこのテーマを取り上げたが、しかし今回は（昨年は2時間〈=240分〉だったが）1時間〈120分〉しか時間が無く、それゆえ今回は関連したテーマである“カーニバル”にも目を向けるというわけにはいかなかった。

《テーマへの導入》

テーマへの導入として、学生たちにすでにもう復活祭について聞いたことがあるかと尋ねたが、これにはたいていのものがはいと答えた。しかしながら、復活祭では何が祝われるか、何日間このお祭りは続くのか、なぜ卵とイースターのウサギが復活祭の行事の中心を占めているのか、という問いに対しては誰も答えることが出来なかった。

語彙の導入には、私が持参した復活祭用の色々な飾り付け（中身を除かれ絵の描かれた卵、うさぎ、ひよこ、復活祭用の皿、復活祭用の鳥の巣そして復活祭用の花輪）や工作用小道具類が役に立った。

《テーマの習得》

復活祭というテーマは、復活祭の祝いの歴史的背景や一般的な復活祭の行事を扱ったドイツ語教科書「テーマ3」の中の短いテキストを使うことによって、参加者たちによって十分に理解された。

《深化》

テーマの掘り下げに役立ったのは、「イースターの卵探し」というタイトルのホフマン・フォン・ファラスレーペンの手になる短い簡単な復活祭を歌った子供向きの詩を読み理解したことであった。この詩があまりに抽象的なままで終わらないように、私はコース参加者に短時間部屋から出してもらい、その間に各人に3個のチョコレートの卵を教室のどこかに隠した。それに続く卵探しの際には、ドイツでこの種のゲームの際によく行われるように、「おや、これは暖かい」（誰かがイースターの卵の近くにいる場合）とか「これは寒い」（誰かが遠く離れている場合）ないしはこれを比較級で言う（「今度はまた前より寒くなった」など）といった指示を与えた。

《強化》

この時間に習得された内容、語彙、文法的な諸構造についての理解の強化に役立ったのは、教科書“Alles Gute”のものを私が簡略化した穴あきテキストであった。

授業の最後には復活祭の挨拶“Frohe Ostern”（復活祭おめでとう）が交わされ、またイースターカードは書かれるのか、書かれるとすればどのようにか、という疑問が学生側から提出された。私はドイツから何枚かのイースターカードを持参しており、それらを学生たちに見せた。何人かの参加者が最後に、いつかドイツの復活祭が体験できたらすばらしい、このお祭りに今ではとても興味があるから、と希望を述べた。

もしかすると今後のインテンシブコースにとって一仮にこのテーマがそこで取り上げられるべきであるとしての話だが一こうした学生たちの関心にもっとよく応えるために彼らに復活祭の様子を写したビデオ、とりわけそれが家庭でどのように祝われるかが分かる映像を示すというのはよいアイデアであろう。

[注]

今回のコースのアウトラインをお示しする意味で、参加決定者に送付した資料とプログラムを再録しておく。

インテンシブコースに参加する皆さんへ

春休みをいかがお過ごしですか？

さて、第3回ドイツ語インテンシブコースのプログラムをお送りします。皆さんがますますドイツ語が好きになるよう、スタッフ一同千恵を絞って盛り沢山のプログラムを作成しました。その特色は、現代のドイツ語圏の生きた姿の一端に触れること、ドイツ語によるコミュニケーションの基本を学ぶこと、そしてさまざまなゲーム型の練習を通して今まで学んだことを統合しアクティブな力として定着させること、です。

ともかく一緒に力を合せて楽しみましょう。参加者も教師も共に心から楽しむことができれば、今回のコースは大成功と言えるでしょう。

[講師紹介]

Daniel Arnold (北海道日独協会), 下田恭子 (小樽商科大学, 北星学園大学), Heiko Narrog (北海道大学), Felicitas Dobra (小樽商科大学), Heike Papenthin (北星学園大学), 大塚 讓 (小樽商科大学),

[実務的連絡]

①会場：小樽商科大学札幌サテライト

〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目 北海道経済センター内
(時計台の裏, 入口は札幌市役所北玄関向かい)

②使用教室：Stufe I：6階サテライトホール, Stufe II：8階サテライトオフィス

※教室は名前に反して地味で、かなり奥の分りにくいところにあります。

初回はくれぐれも十分余裕を持ってきて下さい。

③時間割：1時間目＝10時～12時／2時間目＝13時30分～15時30分／昼休み12時～13時30分 (弁当を持参し, 教室で食べてもよい。)

③3月29日の1時間目の冒頭に参加者全員で「出会いのゲーム」を行い, お互いに顔見知りになる。場所は6階サテライトホール。

④持参するもの：教科書と辞書程度。

⑤このコースのOBの榊山元君 (今月初めまでパイロイト大学に留学) と佐々木春香さん (昨年パイロイト大学の夏期コースに参加。もうすぐ4年生) がコースのお手伝いをしてくれます。何かあったら二人に相談して下さい。見掛け通り親切です。

⑥茶菓子代：300円 (それぞれの教室の所定の箱に入れ名前をチェック)

⑦最後の時間に簡単なアンケートに答えて下さい。皆さんの意見を参考にして今後のコースをさらに良くして行きたいので。

1999年3月18日

大塚 讓

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

※コース開始までに質問・疑問等があったら大塚まで連絡して下さい。

Tel & Fax：(自宅) 0134-27-3935

(大学) 0134-27-5427

E-Mail:otsuka@res.otaru-uc.ac.jp

99 年春季ドイツ語インテンシブコースプログラム

		1 講目 (10 時~12 時)	2 講目 (13 時 30 分~15 時 30 分)
3 月 29 日 Mo	I	Arnold/Otsuka (30 Minuten) <i>Kennenlernenspiel</i> 出合いのゲーム Alle Teilnehmer 参加者全員 (6 階ホール)	Otsuka 大塚 <i>Kommunikationsstrategie (I)</i> Anfang und Schluss コミュニケーションの戦略 (I) 発端と終結
	II		Arnord <i>Kennen Sie Rösti ?</i> <i>Rösti</i> っていう料理知ってる?
3 月 30 日 Di	I	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (II)</i> 空港・駅・ホテル	Arnord <i>Kennen Sie Rösti ?</i> <i>Rösti</i> っていう料理知ってる?
	II	Arnold <i>Das Dorfleben in der Schweiz</i> スイスの村の生活	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (II)</i> 空港・駅・ホテル・旅行案内所・道を尋ねる
3 月 31 日 Mi	I	Dobra <i>Toleranz und Intoleranz</i> 寛容と非寛容	Shimoda 下田 <i>Reiseplanung: Erika-, Goethe- und Märchenstraße</i> 旅行プラン: エリカ街道 ゲーテ街道, メルヒェン街道
	II	Shimoda <i>Sprichwörteruche in Bildern</i> 絵の中に諺(ことわざ)を捜す/ <i>Gebrauchsanweisungen schreiben und erzählen</i> 物の使い方を書き説明する	Dobra <i>Eine Minderheit in Deutschland</i> — Die Sorben — ドイツの少数民族—ソルビア人
4 月 1 日 Do	I	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (III)</i> 旅行案内所・買い物・レストラン・道を尋ねる	Narrog <i>Musik: die Young Gods</i> 音楽: 若き神々たち
	II	Narrog <i>verliebt-verlobt-verheiratet-geschieden</i> 恋愛—婚約—結婚—離婚	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (III)</i> <i>Versuch eines Interviews</i> インタビューしてみよう
4 月 2 日 Fr	I	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (IV)</i> 車中・約束・招待 付録: 榊山君によるパイロイト生活の紹介	Papenthin <i>Werbung in Deutschland</i> ドイツのコマーシャル
	II	Papenthin <i>Ostern</i> 復活祭	Otsuka <i>Kommunikationsstrategie (IV)</i> 約束・招待・苦情・議論 付録: 榊山君によるパイロイト生活の紹介